

女盗賊だけの砦にやってきた男、
砦の頭は昔犯した女だった！
因果のキ○タマ潰し！



一章 ふんどし野盗の合体志願

太助が暮らす下兎（しもうさ）の国の小さな村の近くには、昔山城があった。

地元の大名家と隣の大名家の国境がこの辺だったころ、榊家が作ったものだ。

国が広がり、国境線が動いたことで放棄された。

そこに最近住み着いた盗賊たちは松木党と名乗っていた。

車輪が二つの荷車を押す太助。

後ろからは弟。弟のほうが体格がいい。成人した兄弟なら別に珍しくもない。

荷車には米俵が三つ。

縛り付けているので落ちはしないが、山の尾根沿いに築かれた山城に押し上げるのはかなり大変だ。

それでも、太助は内心うきうきしていた。

盗賊の砦に、米を売りに行く。

あまり楽しそうな感じのミッションではないだろう。だが、弟も楽しそうだ。

「兄ちゃん、あの話、マジなんだよね」

「マジらしいぞ！ 松木党って……女ばかりの盗賊団！」

「うひょおお、絶対欲求不満じゃん……米だけじゃなくて、チ○ポまで求められるじゃん！」

二人とも、まだ結婚前で、恋人もいない。

若いので性欲が溜まって仕方がない。

太助は長男だから将来結婚できるので耐えられるが、次男である次郎丸は将来に期待して耐えるというわけにもいかない。

日本の農家の次男であるから普通にやっていたら結婚もできず一生部屋住みだ。

長男総取りの直系家族システムだから仕方がない。

これが中国式の男子兄弟公平配分の共同体家族システムならまた別だろうが。

しかし土地が狭い日本でそれをやるとすぐに農地が細って一族が潰れるから直系家族制度にならざるを得ない。

鎌倉の時代なら男女関係なく均等分配だったようだが、家が細分化してまずいことになったようだ。

この時代、いわゆる戦国時代にはもう直系家族制度で長子相続なので、一樣そういうこともない。

まあ、次男以下は辛いのだが。

——まったくやってらんねえぜ。俺も兄ちゃんみたいに戦いでて、女に突っ込みつつ金も稼いで、田んぼでも買わないと一生浮かび上がれねえ。

女盗賊らに期待しつつも、一発逆転の夢を見る。

兄のように、といっても、太助は別に戦で略奪して一儲けしたわけではない。

ただ、「女を犯しまくって楽しかったです」という小学生並みの感想を弟に語って聞かせているだけだ。

次郎丸は、そういう好き勝手出来るなら略奪も余裕だな、と思っている。

思っているというか、一緒に戦に出た者たちの中にはうまい事金目の物を奪ってきた者もいる。

太助は二〇歳、次郎丸は一七歳。

太助が戦に出たのは四年前、次郎丸は一三で当然留守番だった。

近くの領主の募兵に応募した。

体格がまあまあいいので長槍兵になった太助は特に何の働きもしなかったが、味方が勝ったので近くの村に略奪に行った。

そこで**童貞を強姦で捨てる**という無茶な体験をし、さらに何人ともなく女を犯しまくった。

その時顔に切りつけた娘が、今や女だけの盗賊団松木党の頭であることなどは知る由もない。

もし頭がそのお互いの不幸な経緯に気づいたら、**犯すのに使った体の部分を念入りに責められる**のが目に見えている。さすがに**強姦自慢をするキ印**の太助でも、のこのこ柴に向かうわけもない。

しかし知らないので、むしろ胸とその部分を期待に膨らませて山を登っていた。

と、後ろから男たちの声。

鉄兜に褌、サラシというなんだかわからない格好で刀だけ背負った男たちが一〇人ほど登ってくる。

見るからに野盗。

というか、野盗だろうが何だろうがとにかく近づきたい感じの人間たちではない。

当然、車を狭い道でよける。

と、次郎丸が斜面を転げ落ちる。

「じ、次郎丸っ！」

邪魔なんだよ、と野盗らしい男が吐き捨てる。ぶつかっただい、突き飛ばした。

斜面を斜めに転がり、運よく通ってきた道に落ちて止まる。

止まらなければ、山の下まで転がり落ちかねない。そうなっていたら大怪我ではないか。

それを見下ろし、笑いながら登っていく野盗たち。

——なんだあいつら？ もしかして、松木党の奴らの男？ おいおい、あんな**ウェイ系**と付き合ってるのか？

褌にサラシのウェイ系もないが、人の迷惑顧みず自分だけ楽しければいいという雰囲気ではある。

起き上がる次郎丸を支えて起こす。怪我はないが、ショックで震えている。それでも押ししてもらわねば上がれないのでそうしてもらおうしかない。

「クッソ、なんだあのウェイ系のクソども……死ねばいいのに」

「いや「ウェイ系」ってなんだよ兄ちゃん……」

山城は尾根に沿っていくつかの曲輪が設けられている。

もともと全部使われていたが、松木党はその一番下の曲輪しか使っていない。

松木党は一〇〇人程度で、もともと城にいた兵士は五〇〇人位だったので縮小は当然といえるだろう。

一番下の曲輪までとはいえ、荷車を押し上げるのは重労働だ。というか、それが軽いものなら山城として問題だろう。

何とか一の曲輪まで登る。

昇ると、まず広場。向こうに堀と丘、丘の上に柵。

堀と柵に守られた丘の左右に道。

道をふさぐように、柵と門。門といっても柵を組み合わせた簡素な物だ。

そこで敵を止め、丘の上から矢で撃つ形。

広場に、先に上がった男たち一〇人ほど。

その前に、二〇人ほどの女たち。袖がない簡単な着物だったり、下着の上に腹巻という胴鎧を着ていたりと適当な恰好。皆刀や薙刀を持っている。

強張った女盗賊らと違い、野盗らは数で劣っていても余裕に満ちていた。

ニヤニヤしながら話しかけている。

「そもそもよお、こんな女だけの砦なんて無理があんだよ！」

「そうそう、俺らと合併しようぜ」

「そして合体もしちゃおうよ」

腰を振る男。

ゲラゲラ笑う仲間の男たち。

眉を顰め、唾を吐いたりと陰悪な松木党の女たち。

少しホッとする太助。

どうやら、この態度の悪い男たちは松木党の者たちの「男」ではないようだ。

とはいえ、あまりいい流れとも思えない。

——戦に来た？ いや、一樣話し合いか？

女盗賊の一人が進み出る。

仲間の盗賊らの視線から、中心的な人間なのが太助にも分った。

お菊姉、などと誰かが呼んでいる。

そのお菊が、唾を飛ばしながら話し始める。

「私らはねえ、あんたらみたいなのが嫌いだから、ここで女だけで暮らしてんだよ。この腐れキ〇タマが！」

いきなりの発言にたじろぐ野盗たち。

さらに叫ぶお菊。

「大体ねえ、あんたらクソみたいな女にちやほやされてんだろうけど、それモテてるんじねーから、お前らに殴られたくないからいい顔してるだけ。あんたらから暴力取り上げてみなよ、女なんて誰一人相手にしなくなるから。モテてんじゃねー、脅してんの。わかる？」

「こ、この女！」

顔を真っ赤にする男。多少自分でもそんな風に思っているのかもしれない。

自分は強い男として女を侍らせているが、**冷静に考えると好かれる要素などない**と。

真っ赤にして、お菊の着物の襟首をつかむ。

「犯してやるぜ！ はふっ！」

へこっ、と腰を引く野盗。

後ろから見ていただけなので直接的に何が起きたのかは太助には見えない。

だが、わかる。

男ならわかってしまう。

思わず自分も腰を引く。

——あ、あの女……玉を……

「ほおおおおお」

褌一枚で保護されているに過ぎない股間を押さえ、口を鯁張らせる野盗。

前に立つお菊は、膝を軽く上げていた。

それが男のどの部分に当たったのか、見ている全員が理解する。

野盗や太助らは青ざめる。

女たちは嘖き出す。

「やだあ、お菊姉さんったら酷ーい！」

「タマタマ蹴りましたよね、今」

「そこだけはだめですよ！そこは、男の人の、最大の……きゅーしょ、なんだから！」



「そこ蹴られるとどんな武術の達人でも、男である限りは「はぐうう！」ってなっちゃって、情けないやら可愛いやら、大変なんだから！」

笑い、股間を押さえて腰を引き、フリフリと振ってみせる女盗賊もいた。

所詮、女たちにとってそれは他人事だった。

どういう不利な展開になろうと、絶対に自分たちは同じように玉を蹴られることはない。

それを心の底から理解している、**女という特権階級**にとって金的はただ笑える話でしかない。

玉が潰れても治るこの世界ならば——男性器の損傷だけを治す不思議な細菌が蔓延している——なおさらだ。治らないなら多少は「いやいや、潰れたらやばいでしょ」という良心も生まれるが、治るなら女たちの心の中に玉への容赦など生まれようがない。

顔を真っ赤にする野盗たち。

「お、お前ら」

「ごめんごめん、お腹狙ったんだけど、変なところ当たっちゃったね？ 大丈夫だった？ そんな強く蹴ってないよ、タマタマなら、ギリギリ動けなくなる程度の力しか入れてないから」

「や、やっぱりわざとじゃねえか！」

別の野盗。

お菊に食って掛かるが、腰が引けている。

股間を指さし、頭を振るお菊。

「ちょっと、おキンキン庇いすぎでしょ。腰引けてんじゃん」

「ふ、ふざけんな」

「男なら、こうやって腰突き出して堂々としなよ。ビビってないでさ」

着物の前をはだけ、下着越しの股間を突き出すお菊。



見ていて唇を噛む太助。

——あいつ、自分は玉がないから蹴られないと思って大胆に……

「誰がビビるかよ！ 腰ぐらい……あふっ！ い、今！？」

挑発され、腰を突き出した瞬間を狙いすました爪先蹴りが襲う。へこ、と腰を引いて真っ青になる

男。

「またも、大盛り上がりの女盗賊たち。」

「きゃー！」

「ぎゃはははは！ 金蹴り二人目！」

「爪先キーク！」

「ゴールドボールをキックキック！」

戦国時代は南蛮と交流があるので、多少の英語が知られていても不思議ではないだろう。

飛び跳ねて手を叩く女たちに、目を血走らせる野盗たち。

「お、お前らもう許さねえ！」

「ぶん殴って犯してやるぜ！」

「あんたらそればかりねえ」

「タ○キン抜いてあげるよー、何度も何度もねー」

「玉再生のおかげで、一人で何度も去勢楽しんでうれしいでしょ？」

この下兎は上兎の南であり、伊豆半島にある。

この世界の伊豆半島は我々の世界の二倍以上巨大である。

その下兎のさらに南端で、一〇〇年ほど前に奇病が流行りだす。

睾丸が腫れ上がる妙な病気で、不妊が心配されるが別にそんなこともなかった。

しばらくすると元の大きさに戻る。

なんだかわからないが、日本全体に広がっていく。

ある一人の男がそれに罹り、両睾丸が腫れ上がるのに飛び上がるほど驚いた。事故で片金を失っていたのに、両玉が腫れたら驚くだろう。

謎の奇病は玉だけではなく、竿まで再生させた。

それもその速度は並ではなく、瞬く間に治してしまう。

その効果が全身に回れば不死身になれるのに、と考えない者はいないが、男性器にしか働かない不思議な病気だった。

腫れが収まってからも、再生は一生続く——細菌が体に残るのだ。細菌など知らない戦国時代の人々にはわかりようもないし「細菌のせいだ」とわかってもらってもやはりこれは不思議でしかないだろう。

実に奇妙な病気だった。

とにかく、その病気は男たちにはいざというときに玉無しにならないという安心感を与えた。

一方で女たちには「治るんならそこそこの理由で**おもっくそ行ってもいいな**」というこれまたある種の安心感を与えた。

実は、目に見える症状がないので皆気づいていないが、女もこの病気「玉戻し病」には感染する。

女がかかった場合、後に残る効果は「男性器の再生」ではなく「そこへの攻撃に性的興奮を覚える性質」だった。

といっても、それほど強烈な衝動ではない。

しかし、玉を責めると何か嬉しく、興奮する、そんな小さな金責めドSに成長する芽をこの病気をもらえず細菌は女たちに植え付ける。

まるで女が再生するのをいいことに男の玉を潰しまくる世界になってほしいと思っているかのような、妙な細菌だった。

野盗たちが、女盗賊らに掴みかかる。

「おらっ！」

「きゃっ！」

「この、放せよ！」

「はふっ！」

「キ〇タマ狙って！ キ〇タマ狙って！」

「蹴り潰していくのよ！ クソ偉そうな男性様の、最大急所の肉ボールをね！」

人数は、二対一。

それでも、凶暴な野盗らは女盗賊たちを押しまくる。

お互い武器を抜かず、押し、殴り、蹴りあう。

力と体格で圧倒する男たち。

しかし、時々ラッキーパンチが股間に当たると脆くも崩れる。

「ふぐっ！ あ」

「おらおら！」

股間を引いた野盗を押し女盗賊たち。倒れるとかけより、踏みつける。股間を狙い、蹴る、踏む。

踏みつける。辜丸を狙って踏みつける女盗賊たち。

頭や腹を狙える場面でも、執拗に股間だけを狙って踏みつける。

執拗に、執拗に、急所狙い。

その熱意に気づいた野盗と見ている太助たちは戦慄し、玉を縮み上がらせる。

「ちょ、やめっ！」

「ほらほら、タ〇キンタ〇キン！」

「キ〇タマ踏み潰すのよ！」

「ふぐっ！」

「あは、草履の下でブチュっといったよ！」

「すぐ治るから、何回か踏み潰しときましょ、男の急所」

一人が何度か玉を潰されて悶絶するごとに、手が空いた二人が別の相手に向かう。

執拗に股間を狙ってくる女たちに、徐々に数が減る野盗らは顔を引きつらせてくる。

玉が治らないなら、潰させるわけにはいかない、初めから刀を抜いて殺し合いだろう。

だが玉が潰れてもすぐ治るなら、下手に刀を抜いてお互い切りあいになれば、自分たちも死んだり怪我をするのは損だ。

女盗賊たちも、抜けば相手が抜くというメカニズムは同じ。

結果、素手でやりあうことになる。

三人四人と、金的を蹴られ、倒れたところを股間を踏み潰されて悶絶する野盗たち。辜丸が潰れるが、すぐ治るので安心だ。しかしそれを見越し、磨り潰すように踏まれ続けるので何度も潰され、意識不明になるまで追い込まれていく。

あまり安心ともいえないが、治らないのよりは百億倍ましではある。

「おらおら、潰れる潰れる、おキ〇タマ潰れるろ！」

「よし、痙攣しだした！」

仲間に次々加勢する女盗賊。

減るばかりの野盗たち。

残った者たちが囲まれてくる。

腕力の差は歴然どころではない、必勝のつもりだったのに、急所を集中攻撃されて追い詰められつつあることに震える野盗。

思わず、うめく。

「お、女のくせに……」

「あー！」

「言ってしまいましたなあ」

「え？ え？ 俺、何か言った？」

やばいことを言ったと気づき、**歴史改変**に挑む野盗だが、女盗賊らは聞いていない。

「おチ○ポついてりゃえらいの？」

「デカけりゃ偉いんじゃない？ 知らへんけど」

「脱がせてみてやろうよ、ご自慢チ○ポ」

じりじりと、距離を詰める女盗賊たち。

「うあ、うわ、いってねえ、言ってねえよ！ 俺は言ってねえ！ ファクトチェック(笑)するぞ！ 俺

が「女のくせに」といったのは、**誤り**！」

「なんか言ってますけど。禪に鉄兜っていうふざけた格好のくせして南蛮語使いこなしてますけど」

「ちゃんとした人が積み上げてきた言葉に寄生するフリーライダー野郎は去勢するしかない」

「はひいいい！ く、腐れマ○コどもが……玉さえ狙われなきや。あ」

「そらっ！」

お菊、飛びつき、野盗と絡み合う。

手を伸ばす。ふんどし、そのふくらみ。

暴れまくる野盗が、そこを握られると体をこわばらせる。

「あああああ！ やめっ！」

暴れる、手を伸ばす。自分も思わず、相手と同じように。

周りの女盗賊らがそれに気づく。

「ぎゃはは！ 見てよ！ あいつもお菊姉と同じように、タマタマ握り潰そうとしてる！」

「やだ、気を付けてお菊姉！ おキ○タマ潰される！」

「お菊姉の男の急所が大ピンチ！」

「あは、でも大丈夫」

「だってねえ……私たち女の子様には……」

ぺら、と着物の前をめくり、棒立ちの残り三人の野盗に見せるともなく見せる。

「金の玉がないんだもんねー」

大笑い。睾丸を持たない、「女」であるという圧倒的優位を噛み締めていた。

太助はその金的嘲笑を遠くから見つつ、唾をのむ。急所が縮み上がり、顔が赤らむ。

——くそ、女どもが……

口には出せないことでも、心の中なら自由だった。

残った野盗三人も同じだ、目を逸らし、顔を赤らめている。

そうしている間にも、お菊は戦っていた。

「女なら！ フグりを掴んで……握り潰す！」

「おぐっ！」

ぐちゅ、と思いきり手を握りしめるお菊。男ならどうしてもギリギリのところまでためらいが出るが、女であるお菊にとって睾丸を握り潰すのは別にためらう事柄ではなかった。

力が強いほうでもないお菊だが、一般的な成人女性の握力があれば睾丸を潰すには十分である。

両睾丸を女に握り潰され、泡を吹く野盗。

歓声を上げる女盗賊たち。

「よーっし！」

「さすが菊姉！」

「ぎゃははは、見てあいつ！ 泡吹いてる！ 女にキ〇タマ握り潰されて泡吹いてる！」

「お強い男性野盗も、お急所キンキンを狙われちゃどうしようもないねえ」

ついに、野盗らが半狂乱になる。

「うわあああ！」

手足を振り回し、何とか突破して逃げようとする。

「うわっ！」

「必死だこいつら！」

「っていうか、もう残り三人……七人も見捨てて逃げるつもり？」

「キ〇タマついてんの？」

「まあついてんでしょうねえ、だからこっだけ必死なわけで。私らなら別にこの状況、どうってことないもんね」



「潰されるもんないし、ぶら下げてないし。ぶらぶら肉の玉、ついてないし」

世間話のように言いつつも、数人の女盗賊は倒れた野盗らの足を開かせ、念入りに股間を踏み潰し続けていた。

一度潰されたら終わりではない、というのは救いでもあり、文字通り「終わり」がないという事でもある。

治る端から、何度も睾丸を踏み潰されて痙攣する野盗たち。

すでに数人は痙攣状態だ。玉潰しが終わったので、すでに玉は再生し、しばらくすれば意識も戻る。

それらの顔を見下ろす女盗賊らの女の部分はじっとりと濡れていた。細菌のせいもあるが、それはきっかけで、すでに彼女ら自身が本当に好きなのだ。

男性器破壊が。

特に、今踏み潰している女盗賊の濡れ方は尋常ではない。

太ももに垂れてくるほどだ。

べろりと舌なめずりをしつつ、踏む。男の太ももの間を思いきり踏む。

「あー、情けねえ情けねえ。男の急所を女に潰され、今日からみんな女の子、キ〇タマ無くして女の子、と。そらそらー、キ〇タマ踏むよ、踏み潰すよ？ あは、男なんて威張ってても、ここ狙うとてんで弱いんだから」

震える太助。

曲輪の端のほうで、しゃがんで震えていた。股間は縮むだけ縮んでいる。

——ひでえ、無茶苦茶。女ども。あ、また玉を。治るからって無茶しやがる。畜生、急所ばかり

狙いやがって。女にはわからねえだろうけど、死ぬほど痛いんだぞ、そこは。

と、追い詰められた野盗たちが、目を血走らせる。背中に縛った刀に手をやる。

「うおおおおお！ やってやる、やってやるうううう！」

「きゃっ！」

「やば、こいつ頭が！」

「女相手に刀抜いてんじゃねえ！ チ○ポコ付いてんの！？」

「こういうウェイ系はどうせチ○ポコ小さいから暴れて強い振りしてさあ、ごまかすしかねーんでしょうよ。それが女の子にボコられちゃ、こうなるわなあ」

「ウェイ系ってなんだ！？ とにかく、殺されたくないならどけやあああ！」

刀を抜いた一人。

それに同じく刀を抜き、近づくお菊。

「クズチ○ポ君、かかってきなよ」

「じょ、上等だよおおおお！」

上段に振り上げ、駆け寄る。

女盗賊たちが逃げる。一人、踏み込むお菊。刀を挙げ、受ける。受けつつ、素早く片手を離し、腕を取って投げる。柔術の動き。

投げた押すと同時に、股間を踏みつける。

「はぐっ！ ああああっ！ こ、こうさ……あああああ！」

思いきり体重をかけ、草履と相手の腰骨の間にある物を押し潰して踏み潰す。

潰れる感触に、頬を緩めるお菊。

「必殺、投げ潰し。感謝しなよ、切りあいなら死んじゃうところを、タ○キン潰して無力化するなら、死にもしないし、玉も後で治るから実質無傷と同じ」

辜丸を潰される痛みを完全に度外視している女の子様のありがたい発言。

しつつ、グリグリと禪を踏みにじる。

「ひiiiiii」

「降参、降参！」

背中に背負っていた刀を外し、投げ出す残り二人の野盗。

微笑み、頷くお菊。

近づいてくる女盗賊たち。

「そうそう、初めからそうすりゃいいのよ。ただの力比べなら楽勝なんだろうけど、女にキ○タマ狙われたら、男に勝ち目はないんだから」

「でも、もちろん「降参」の一言で許されるわけないことはわかるよね？」

「そ、それじゃどうしたら？」

にんまりと笑うお菊。

近くにいた小柄な少女を見る。

「お栗、どうしたら許せるかな？」

「そうですねー、こういうのはどうでしょうかー？」

間延びした話し方の少女。

それでも、先ほどの殴り合いでは人一倍素早く動き、的確に野盗らの金的を蹴っていたのを太助は見ている。

見ているし、太助らが見ていることをお栗も見ていた。

今も、ちらっとそちらを見る。

唾をのむ太助。急所がさらに縮む。

お菊はリーダー格ながら、目の前の敵に集中するタイプ。むしろお栗が周りに目を配っていた感じだ。

お栗が野盗二人に耳打ちする。

こういうことを言ってくれ、やってくれ、という指示。

聞いていて、真っ青になったり真っ赤になったり忙しい野盗。

「え、そ……そんな……」

「嫌ならいいんですよ。仲間の皆さんと同じように、鞆丸潰しですからねー。コウガンコウガン、コーガン潰し金潰しー」

「や、やりますっ！」

野盗二人が震えながら、禪に手をやる。

お栗を見る。

「さー、どうするんですかねー？ おキ〇タマが惜しくないなら、いいんですよやらないでも？」

「や、やりますうう！」

ほとんど半泣きの野盗。

禪を引っ張る、布が宙を舞う。

「きゃー！ 脱いじゃった！」

「小せえ！」

「チ〇ポ小さいねえ二人とも」

「極小じゃん。縮んでるとはいえ、これは無いでしょ？」

「皮だけチンポ」

「これもキ〇タマ抜いて女になったほうがよくね？」

ゲラゲラと笑いながら、縮み上がった股間を指さして顔を赤らめる女盗賊たち。

膝を締め、目を逸らして唇を噛む野盗二人。

「さあ、この後は？ 私たちへのお詫びですよねー？」

「そ、その……本当に？」

「みなさーん、おキ〇タマ潰しの時間ですよー」

「やりますっ！」

ビク、と震えてから、息を吸う野盗二人。

吸ってから、ゆっくりと吐く。

「あの、さっき言われたことを、本当に言わなきゃダメですかね？」

「あー、いやならいいんですよー？」

「ほんじゃ、キャン玉潰し！」

「あああ！ 言いますっ！」

どうにか避けられないかと抗った野盗たちだが、ついに観念する。

観念し、叫ぶ。

「お、俺たちはキ〇タマという、女性の皆さんにはない無様な急所をぶら下げている劣等人種でありながら、すっきりした無敵の股間をお持ちの女性の皆さんに身の程知らずにも逆らってしまいました！」

「俺たち男は女性の皆さんにこの金の玉の狙われてしまうとどうしようもなく、軽く叩かただけで痛くて痛くてたまらず泣いてしまうので、どうかタマタマ攻撃だけは許してください！」

一瞬静まり返る女盗賊たち。

曲輪を震わせるほどの勢いで嘔き出す。

「ぎゃははは！」

「来た来た、自虐言葉責め来た！」

「いつもながら、お栗のセリフは男の心のキ〇タマをうまい事自ら握り潰させるわねえ！」

羞恥に顔を真っ赤にする野盗二人。

それに、昂奮で顔を赤くした女盗賊らが近づく。指で熊手を作り、縮んだ急所を引っ掛ける。

「はふっ」

「いやいや、腰引くほどの衝撃じゃないでしょ。触ってるだけ」

「こっちもね。っていうか、小さいとはいえ、こっちのほうがちょっとはチ〇ポデカいかもね」

「キ〇タマ握りー」

「ひいいい、握らないで」

「本当に握ってるだけじゃん。優しくだよ？」

「ほら、動くんじゃねーよお前ら」

「ひいっ！」

羽交い絞めにされる二人。

なすすべなく、縮んだ玉を揺さぶられる。

女の温かい手で、いくらか緩むとさらに強く握られる。

「ひうっ」

「マジでビビってるわ」

「玉握られたら男ってどうしようもないわねえ」

「女の体はそう簡単に壊せないけど、男の体って無抵抗だと簡単に壊されるよね、玉弱すぎ」

「男は体はタマタマが弱い！ キ〇タマは死ぬほど弱い！ キ〇タマザコ！ キ〇タマザコ！」

耳を舐めるようにして叫ぶ女盗賊。

肉玉を握るもの、耳元で叫ぶもの、それぞれに下着が滴るほど濡れていた。

「あー、こいつらだけ助けるのはほかの奴に悪くね？」

「玉潰し連帯責任でしょ」

「あんたらも後で仲間に文句言われるの嫌じゃないかな？」

「よし、潰そう、キンキン潰そう。ね？ 男らしく」

「やだああああ！」

「脱いだじゃん！ いったじゃん！」

「そりゃそうだけど……ねえ」

熱い息を吐く女たち。

膝を心なしか締めている。

玉を潰したい。

しかし一様許すという条件で自虐言葉責めなどやらせたからには、あっさり反故も難しい。

悩む女盗賊たち。

その後ろで、一人の野盗がよろけつつ立ち上がる。

股間を踏まれたとき、体の中に減り込んで運よく潰れずに済んでいた。

といっても所詮男であるから、金的無効の女と違ってダメージは大きい——女でも股間にダメージを食らうが、男の比ではない——何度も踏みにじられて、衝撃が玉に伝わってのたうち回ったが、潰れはしなかったため他の仲間のように痙攣までは行かなかった。

が、それらしく演技をして、電気あんま体勢から逃れた。

「く、クソマ○コどもが……」

野盗らはすでに逃げようとしていた。そのため、それを追った女盗賊らも出口近くにいる。ついでに荷車を押し上げ、そのままその陰に隠れている太助たちもだ。

出口といっても部屋ではない、山城の外であるから斜面を降りればどこからでも外に出られることは出られる。

しかし金的を食らってよろけた状態で斜面を駆け下りるのは難しい。

なら、どうするか。

人質を取り、逃げるしかないと言った野盗は考えともなく決断する。

そっと刀を拾い、小柄な女にしがみつく。

「あっ」

「お前ら、動くんじゃねえ！」

小柄な女、お栗にしがみつき、刀を首に突き付ける。

「俺と、仲間を逃がせ！ こいつ殺すぞ！」

「おいおい……その子殺したらあんたも死ぬんだよ？ いいの？ さっさと解放しなよ、かるーく、タマタマ蹴って終わりにしてやるからさ。ま、軽くでもすごい痛いけどね、知らへんけど」

パン、と自らの股間を平手打ち。

ビク、と震える野盗。

男には一生無理なことを、平然とやる女に慄然とする。

それでも、刀を下げない。

「ほ、本気だからな」

流石に顔が引きつるお菊。

——逃がしてやるか、でも、すぐお栗解放するかな？ というより……解放するか？ さんざんキ○タマ蹴られていい加減ムカついてるだろ、ここでやったら私らにぶち殺されるけど、この子を連れて山城を出て……どっかで解放するって話になったらするかわからないわよ。

かなりの手詰まり感だ。

野盗は、金的を蹴られたダメージで汗が浮き出し、吐き気やめまいに襲われている。それでも、女盗賊らが妙な動きをしないように目を配っていた。

いや、体がちゃんと動かないからこそ、見る。

手詰まり。

その中で、太助は隠れていた場所から、伏せたままで動き出す。

人質を取っている男に、見覚えがあった。

——次郎丸蹴り落したクソ野郎だ。それがこんなことまで……許さねえぞ。俺は見てねえ。気づかれてもいない。これなら何とか。失敗したら、あの子は危ない。でも、言う通りにしても、こういう連中が約束守るかわかんねえじゃねえか。っていうか、あの顔はちょっと相当頭に来てる感じだから、殺すんじゃないか？ 助けなきゃ、助からねえ。

斜面を利用し、うまく背後に回り込む。

ずっと斜面は通れない。平地に出てくると、さすがに女盗賊らは気づく。視線の先なのだ。

お菊も気づく。

慌てて、話し始める。

「まあまあよ、合併とかは無理だけどさあ、たまにここに遊びに来るぐらいなら構わないぞ。私らほら、女だけだからさ」

「へ、へっ、初めからそう素直に言ったりゃこんな目に合わずに済んだんだよ」

こんな目、といわれても、治るとはいえ一方的に生殖器を破壊されまくり、のたうち回ったのはかれらであって、お菊たちは多少殴られたり蹴られた程度でしかない。

——なんだかなあ、「こんな目」って……あ、待てよ、それって自分のことかも？ あは、確かに私らが素直なら、あんたらも大事なタマタマ蹴られるような目にあわなかったわよね。それはそれとして、あいつうまくやってよ……失敗したらやばいんだから。でも、放っておいても、やっぱりやばいしねえ。

近づく太助。

背後近くで立ち上がる。

意を決し、飛びつく。

「うわっ！ なんだ！？ あっ！ はぐっ！」

「はい、隙ありー」

刀を持った腕にしがみつかれた野盗。

その股間に、後ろ向きに手を振って掌を叩き付けるお栗。

へこ、と超高速で腰を引く野盗だが、お栗は押し付けるようにして手を密着させる。

そしてそのまま、手の中に入った物体を握りしめる。

「ちょおおおお！ ほぐうううう！」

背後から抱き着かれた場合に使う護身術の動きそのままだった。

首に刃物を突き付けられてそれは難しいが、一瞬でもそれを止めてくれれば運動神経のいいお栗にはできる。

特に何も習っていない。

ある程度の戦い方は松木党に入ってから習った。

それでも恐れずこの通りなのだから相当勘がいいといえる。

「あおおおお！ ほおおおお！」

腰を引けるだけ引き、左右にグネグネと振る。しかし腕の可動域のほうが自由で長いので、金握りからは逃れられない。

女盗賊らが次々と駆け寄り、悲惨な状態の野盗にしがみつく。

「ぎゃはは！ 腰振ってる腰振ってる！」

「必死じゃん、タマタマにげろー、潰されちゃうぞー」

「はほおおおおお！」

女にまわりつかれ、もはや肉玉を握り締められても振り払えない。

「あああああ！」

絶叫、膝をバタバタと閉じたり開いたりする野盗。

もちろんそんなものではどうにもならない。

小柄なお栗であるが、それでも人体最弱の部分の握り潰すことはできる。

両手でやるならなおさらだ。

「そらそら、潰しますよー？ コーガン潰しますよー、二個とも、二個ともですよー？ あ、でも玉無しはかわいそうだし、お情けで片っぽ残そうかなー？」

「片金残して、お願いイイイイ！」

「それじゃ……二個とも潰す！ キ○タマ潰れろっ！ ぎゅううううう！」

「あぎあああああ！ あ」

「おっ」

ブチュ、と手の中で何かの塊が潰れるのを感じるお栗。

泡を吹き、崩れる野盗。

その足を数人の女盗賊が左右に引っ張り、二人三人がかりで股間をゴリゴリと踏み潰しまくる。

不思議な病の力で玉が治ることを知っている女たちに容赦はない。

治る端から潰しに潰す、仲間の首に刀を突きつけたのに、殺さず玉責めで済ますのだからむしろ慈悲深いと心から思っていた。

ついでに、禪もむしり取った。

「お、こいつチ○ポデカくね？」

「生意気だよ！ ちよん切ってやろう！」

「治るからね、おチン○ンも。そんじゃ切りまーす」

「や、やめ……あああああ！」

無造作に男のシンボルをつかむ女、引っ張り、根元に短刀。こちらも治る。「切っても生える＝切ってもヨシ」と心から信じている女たち。

「あぎいいいいいい！」

泡を吹き、ビクンと体をそらせるが、抑え込まれて動けない野盗。

血まみれの手で、切ったものを天に突き上げる女盗賊。

野盗の顔の前にも示す。

男根を切られたことを否応なく自覚させ、さらにそれを周囲の女全員に知らせたこともわからせて屈辱を与える。

「はい、おチ○ポ切って女の子ー。あんたにおチン○ンがないことをこの場の女みんなが知ってまーす。あ、玉もう治ってるじゃん」

「はいはい、ほんじゃ蹴り潰しますねー」

「人殺そうとしたんだから自分も殺されて当然だけど……キ○タマ潰しで許してあげるよ。優しいでしょ、女の子様は？」

「うぎiiiiiiiiii！」

ボスボスボスと、血まみれの股間を数人に踏みつけられる野盗。

と、いつの間にか根元から切断された一物が生えている。

「お、チン○ン戻ったよ」

「やっぱデカイじゃん」

治ってすぐは縮んでいないので、先ほど切られた時よりさらに大きく見えた。

「うーんで、でもよく見りゃ誤差程度かなあ、巨根って程じゃないわ」

「直前に見たのがクソチ○ポだから、デカく見えただけかー、残念！」

「っていうか、でっかかったらどうしたの？」

「別に、タ○キン潰しに変わらないよ」

玉蹴りのうちにすぐに縮む。

余計なことをしてしまった野盗に、金的嘲笑の報いが念入りに与えられていく。

体験版終わり

この時点では助っ人的な立場の主人公。

まさか自分が砦の頭を昔犯していたなどとは思っていません。

続きは製品版でぜひお楽しみください。